

関西支部だより

1. 海上気象・霧に関する月例会

昭和49年10月4日、海洋気象学会と共催、神戸海洋気象台で開催、各題目の講演要旨は次のとおり。

(1) 舞鶴湾の海洋調査について

鬼頭正隆（舞鶴海洋）

a. 1974年4月23～24日東湾西奥に近い所に海洋気象台ロボットブイを碇置き、表面、2m、7mの深さについて24回の観測を行なった結果を報告した。その結果、磷酸塩、全磷、亜硝酸塩、硝酸塩の濃度は7mで最も高く2mで最も少ない傾向がみられた。

b. 1974年5月23～24日の観測では磷酸塩、亜硝酸塩、溶在酸素等の分布は塩分の分布で示されるものと極めてよく一致していた。

(2) 由良川沖の流動調査結果について

赤松英雄、藤原伊佐美（舞鶴海洋）

1974年5月19日～24日、由良川沖において清風丸により海面付近の水平拡散収束の調査を行った。測定方法は、一辺約500mの正三角形の頂点に3個のドリフトブイを配置して、レーダーによりそれらの位置を求めた。三角形の面積の変化から水平拡散、収束を計算した結果、 10^{-4}sec^{-1} のオーダーが求められた。

(3) 紀伊水道の風について 城松 幸（神戸海洋）

1974年11月27日から12月10日にかけて紀伊水道北部海域で実施した舞鶴、長崎、神戸による冬期季節風の海上気象観測資料から本海域の冬季の風の一般的な分布特性を求めた。

(4) 紀伊水道の波浪について

原見敬二（神戸海洋）

1973年12月3日、徳島 ESE 25 km で定点観測中、11時に寒冷前線通過（最大19m/s）16時に波高3.7m（タッカー）の孤立波を観測したので解析結果を述べた。

(5) 昭和48年度3船協同観測時の波浪計の比較について 坂根教團（舞鶴海洋）

三船協同観測時における、波浪計（P.M.S. タッカー、吊下げ式）の比較観測の結果、波高（ \bar{H} 、 $H1/3$ 、 $H1/10$ ）の比較係数、修正波高値、波浪特性について述べた。

(6) 1974年の女木島周辺の霧観測について

原見敬二（神戸海洋）

春風丸は同じ海域で昨年4月には濃霧を観測したが、今回はなかった。このため次の項目について両者を比較して相異点などについて述べた。a 海面水温分布、b 暖湿気塊の流入度、c 接水面付近の気水温の鉛直分布、d リチャードソンナンバー、e 海面蒸発量、f 放射量。

(7) 1974年の備讃瀬戸における霧観測結果について（その1） 花沢正策（高松地台）

1972年1月～1974年9月の高松、女木島、直島の資料により、a 発生頻度の年変化、b 霧発生と気圧配置の関係、c 気圧配置別の発生および持続時間、d $T-T_a$ および T_a-T_w と霧発生の関係等について述べた。

(8) 1974年の備讃瀬戸における霧観測について（その2） 塩田輝也（高松地台）

備讃瀬戸における1974年6月8～13日の霧協同観測の解析結果を述べ、さらに1973年～1974年の霧発生時の気温下降状況を調べ、霧発生前3時間、前6時間の気温変化について述べた。

(9) 明石海峡周辺の霧について

堀内俊彦（神戸海洋）

寒候期における異常高温時に発生する霧について、局地的な現象の考察を行った。（橋本理事）

2. 第2回中国地区月例会「天気構造の解析と予報」

昭和49年12月10日米子測候所で研究発表が行なわれた。年1回は是非山陰側の会員が集まって懇話でき、勉強出来る場がほしいという意見が多く、久保広島台長からも、各気象台が主となって県毎に行う研究会の態勢になったので、なおさら気易く隣県の人々が集まれる会がほしいので今後も月例会が続けられるよう望むとの言葉には多くの会員の賛成があった。

1. 山陰東部の降雨について

浜田周作（鳥取地台）

2. 総観規模じょう乱と小低気圧との関係

メソ研究グループ（広島地台）

3. 台風7408号による日本海面のじょう乱

田中貞三（松江地台）

4. 異型的じょう乱の構造解析

根山芳晴（広島地台）

（62頁に続く）

海洋上での測定に限らず日本では大部分の測定地点が海塩核の付着に悩まされている。乾湿計を用いて測定を行う場合には湿球の周囲のガーゼの中に塩分が蓄積され、講演6によれば一週間海岸に放置すれば平均約0.1 mbの水蒸気圧の測定誤差となって現れるため湿球に用いているガーゼを取りかえねばならないという結果を得ている。

湿度計開発の別の困難な点は標準とすべき湿度検定装置がなかった事であろう。まして湿度の速い変動を与える事は容易ではない。恒湿槽は各湿度計メーカーが開発しており、標準となるべきものが近くできることを期待したい。

気象観測の他の測器についても同様であるが、個々の湿度計が良い結果を得てもそれだけでは不十分であり、各種の湿度計を同一場所に集めているような条件下に比較観測を行なう機会を作る事が望まれる。

(支部だより84頁の続き)

3. 海陸風と大気汚染に関するシンポジウム (第一回中国地区月例会)

12月3, 4日の両日、広島市の第2合同庁舎会議室で開催された。出席者は気象庁関係60名, 大学20名, 官公庁, 会社, 協会等55名の計135名にのぼり盛会であった。この論文は関西支部発行の気象技術ノート(月例会ノート)第15巻1号に収録してある。海陸風と大気汚染に関する両総合討論ではコンビナートの方で事前に2年間の結果をふまえての焦点として次のことを提示し、今後究明しなくてはならないのは何か、大気汚染に対し海陸風がどのような形で作用するかといったことに関してフリートークを願った。

- a. 海風前線の形成過程, 構造
- b. 海陸風に対する地形効果
- c. 海陸風に対する一般風の効果
- d. 瀬戸内海での海陸風循環モデル
- e. 海陸風のシミュレーションに対する問題点
- f. 海風前線と大気汚染との関連性
- g. 大気汚染に働らく海陸風の効果特性
- h. 大気汚染の数値実験に対する問題点
- i. 瀬戸内海の環境容量

(以上根山理事)

講演プログラム

日時 昭和49年12月10日 13時~17時

場所: 大阪管区気象台会議室

1. ヒューミスターによる湿度測定の一例
坂根教閑(舞鶴海洋気象台)
2. 電気式湿度計の構造について
浅倉 修(神栄株式会社)
3. 赤外線湿度計について
木村茂行・丸山直之(日本分光株式会社)
4. 研究用湿度計の比較測定
塚本 修(京大・防災研)
5. 熱電対湿度計の動特性について
塚本 修(京大・防災研)
6. 乾湿計の海塩核の影響
佐橋 謙(岡山大・教育)
7. 海気熱収支観測に用いるサーミスター直示湿度計について
神戸正雄(神戸海洋気象台)

4. 湿度に関する月例会

昭和49年12月10日, 大阪管区気象台会議室にて開催した。なお細詳は「湿度計に関するシンポジウム」報告を参照下さい。

5. 「長期予報(気候変動, 週間予報を含む)」の月例会

昭和49年12月16日, 大阪管区気象台8階共用会議室で開催した。

- (1) 全球的, 大気汚染と気候変動
山元竜三郎(京大)
 - (2) 大気大循環スペクトルモデルによる超長波の数値シミュレーション
岩嶋樹也(京大)
 - (3) ブロッキングにおける大規模地形の役割
伊藤久徳(京大)
 - (4) 気候変動のタイムスケールについて
廣田 勇(京大)
 - (5) 1973年と1974年の梅雨期の大気循環の特徴について
島村泰正(高松地台)
 - (6) 冬季, 中緯度寒気の下下に伴ない低緯度上空に発生する強風域について
藤井盛澄(大阪電通大)
 - (7) 高層大気の運動と微量金属成分変動
牧野行男(大阪管区)
- (以上田中理事)